

第17回日本社会福祉学会フォーラム

2021年2月28日

地域における子育て支援

—新型コロナウイルスとの共存の時代を迎えて—
保育ソーシャルワークの視点から



関西福祉科学大学
小口 将典
(会員番号：5253)

自己紹介

出身：岐阜県

職歴：障害児（者）支援施設の支援員、愛知淑徳大学を経て、

現在：関西福祉科学大学にて社会福祉士養成に従事

博士（臨床福祉学）

社会福祉士

介護福祉士

介護支援専門員

専門：保育ソーシャルワーク

ファミリーソーシャルワーク

本日の内容

- 保育ソーシャルワークという新しい学際領域
- 保育のアイデンティティとソーシャルワーク
- コロナ禍における実践から見てきた課題
- 当面、予測される困難さに向けての備え
- 保育ソーシャルワークの方向性

保育ソーシャルワークとは？

「**保育ソーシャルワーク**」とは、子どもの最善の利益の尊重を前提に、子どもと家庭の幸福（ウェルビーイング）の実現に向けて、保育とソーシャルワークの学際的領域における新たな理論と実践としてとらえられています。しかし、そのシェーマ（定義、内容、方法等）やシステムについて、いまだ確定したものが構築されるには至っていないのが実情です。

（日本保育ソーシャルワーク学会ホームページより）

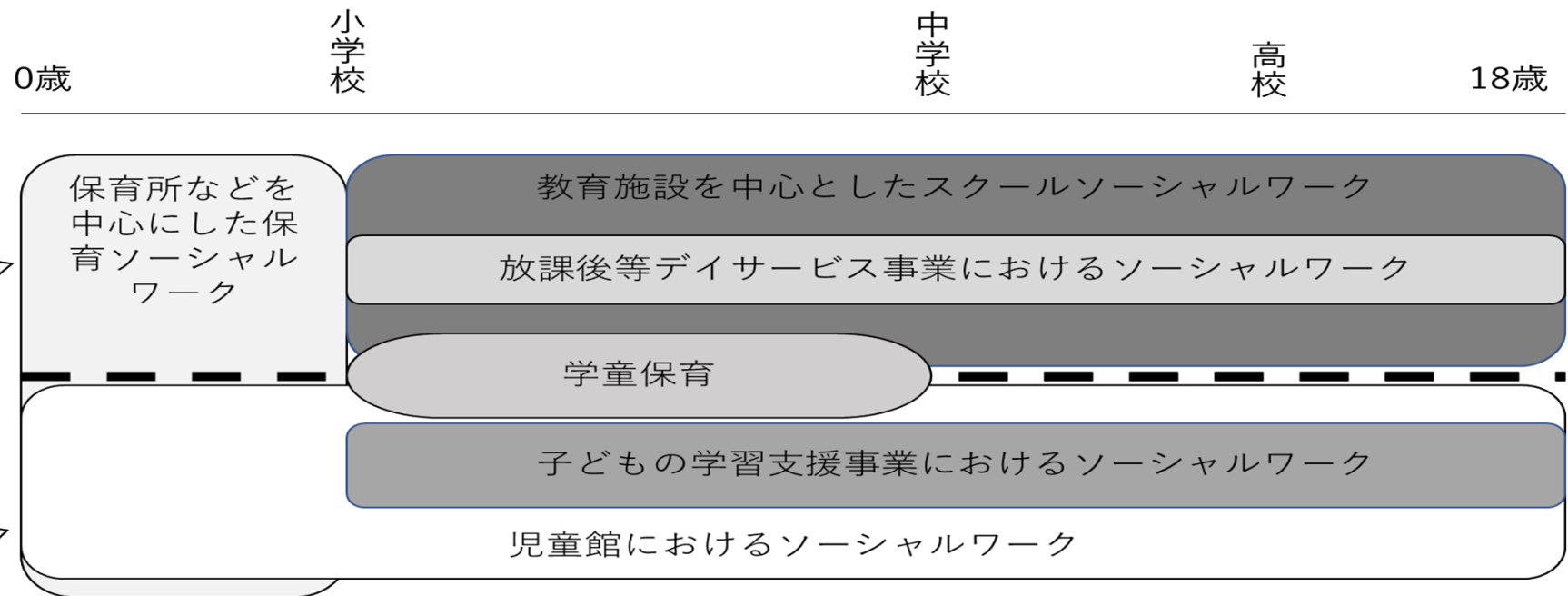
保育ソーシャルワーク研究の課題

- 保育ソーシャルワーク研究は、「**保育にソーシャルワークが必要**」であることを、それぞれの段階をえながら蓄積がなされてきた。現在、実践研究としての体系化が求められている。
- 橋本（2009）は、「先行研究にみる（保育ソーシャルワークの）役割は、実践の進展によって見出されてものではなく、**研究者の学術的見解**であると捉えられる」「指向すべき具体像の不明確さや実践理論の不在が、役割理解やその具体化を阻害する一因である」と指摘。
- 伊藤（2018）は、「保育とソーシャルワークが重複して共通する部分を直接のフィールドとし、その理論的かつ実践的な枠組みを設定するなかで、**（保育ソーシャルワークの）独自の学問体系を構築**していくことが求められる」としている。

- 橋本真紀（2009）保育所の地域子育て支援事業に期待される「役割」--先行研究に記述される「役割」の検討から,教育学論究（1）
- 伊藤良高(2018)「序章保育ソーシャルワークとは何か」日本保育ソーシャルワーク学会監修『保育ソーシャルワークの思想と理論』晃洋書房

保育ソーシャルワークからの論点

- 子どもの育ち・ウェルビーイングへの保育の位置づけとソーシャルワーク
- ソーシャルワーク≠相談援助
- 保育所のみではなく関連領域への拡大（児童館、放課後児童クラブ、放課後子ども教室、子どもの学習支援事業、放課後等デイサービス等）



保育施設の特性

保育の特性	保育の特性を生かした利点
①日常性・継続性	日常性・継続性のある子どもと保護者の 身近な存在 であることから、日常的な支援や関わりを通して相互の関係のなかで支援が展開できる。そのなかで、子どもと保護者の 変化を発見し、継続的な支援や見守り が可能である。
②異年齢の子ども集団	異年齢を含めたさまざまな 子どもの集団 がある。保護者は子どもの発達や生活・遊びについて、 実際に見聞きし 、関わるができる場であり、体験的に子どもについての理解を深めることができる。
③子どもにふさわしい生活の環境と専門職のチーム	子どもにふさわしい生活と環境の場が用意されている。保育の専門家である保育士からの適切な相談・助言を、 保育の環境を通して 得ることができる。
④保護者同士の交流・親子の交流・地域住民との交流	保護者同士の交流や親子の 交流 ができることから、子どもや保護者の姿を見て気づきを得て学ぶこと、 解決に向けての話し合い なども可能である。
⑤地域ネットワーク（関係機関・施設・地域社会資源）による支援	地域のなかで児童福祉施設として関係機関・施設や地域社会資源と連携し、 地域の拠点としての役割 を発揮することができる。

出典：金子恵美（2010）『増補 保育所における家庭支援—新保育所保育指針の理論と実践—』全国社会福祉協議会、p.47～49を改変。

コロナ禍における 保育施設の現状

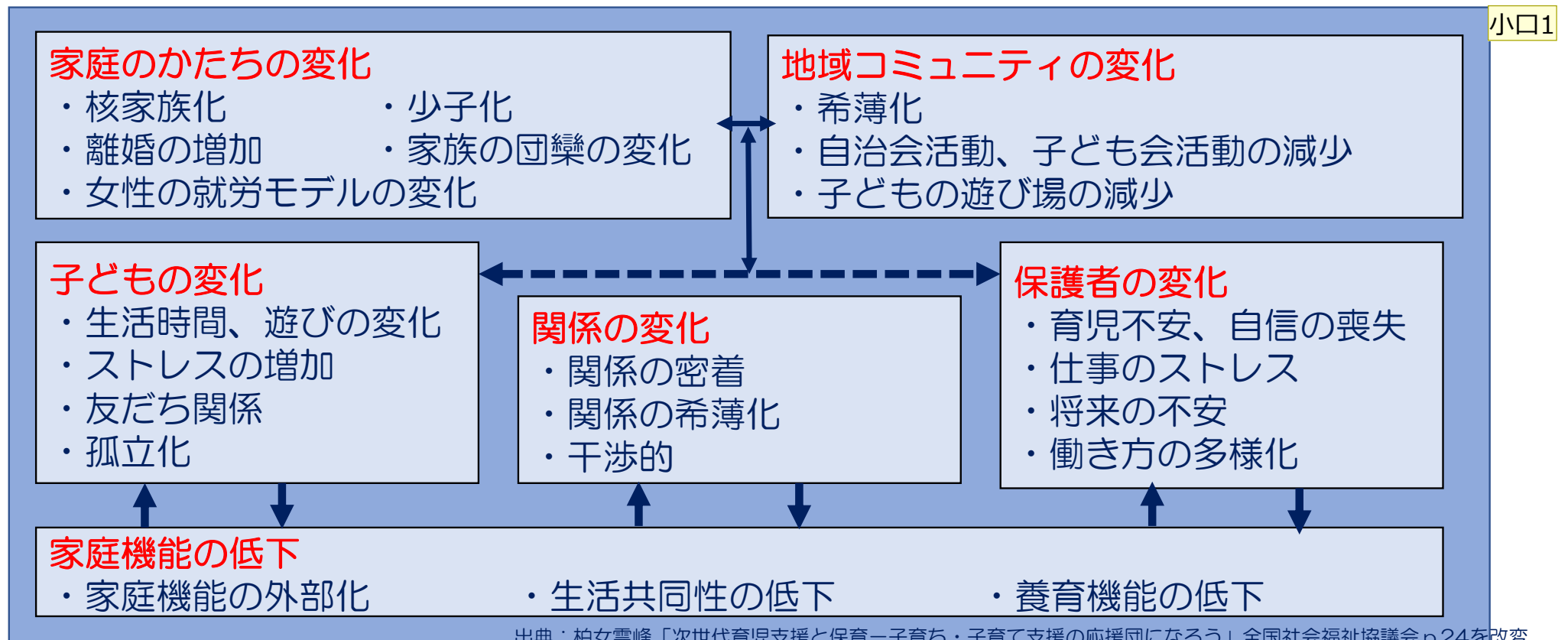


コロナ禍における支援の課題

- 保護者支援においても門で終わり、関わりが希薄化
- SNS、ホームページ、電話による関わり
- 事務量の増加
- 行事変更への対応
- 会議ができない
- アウトリーチの困難さ
- 福祉サービスが使えない
- これまでの保育で培われてきた内容の変更（しゃべらない、行事の縮小、ソーシャルディスタンス）

多重問題への支援

- 1つの問題が他の問題を引き起こし、複雑な関係のなかでお互いに刺激しあい、同時に複数の問題を発生させている。
- 心身の不調として現れる家庭内の問題。



スライド 10

小口1

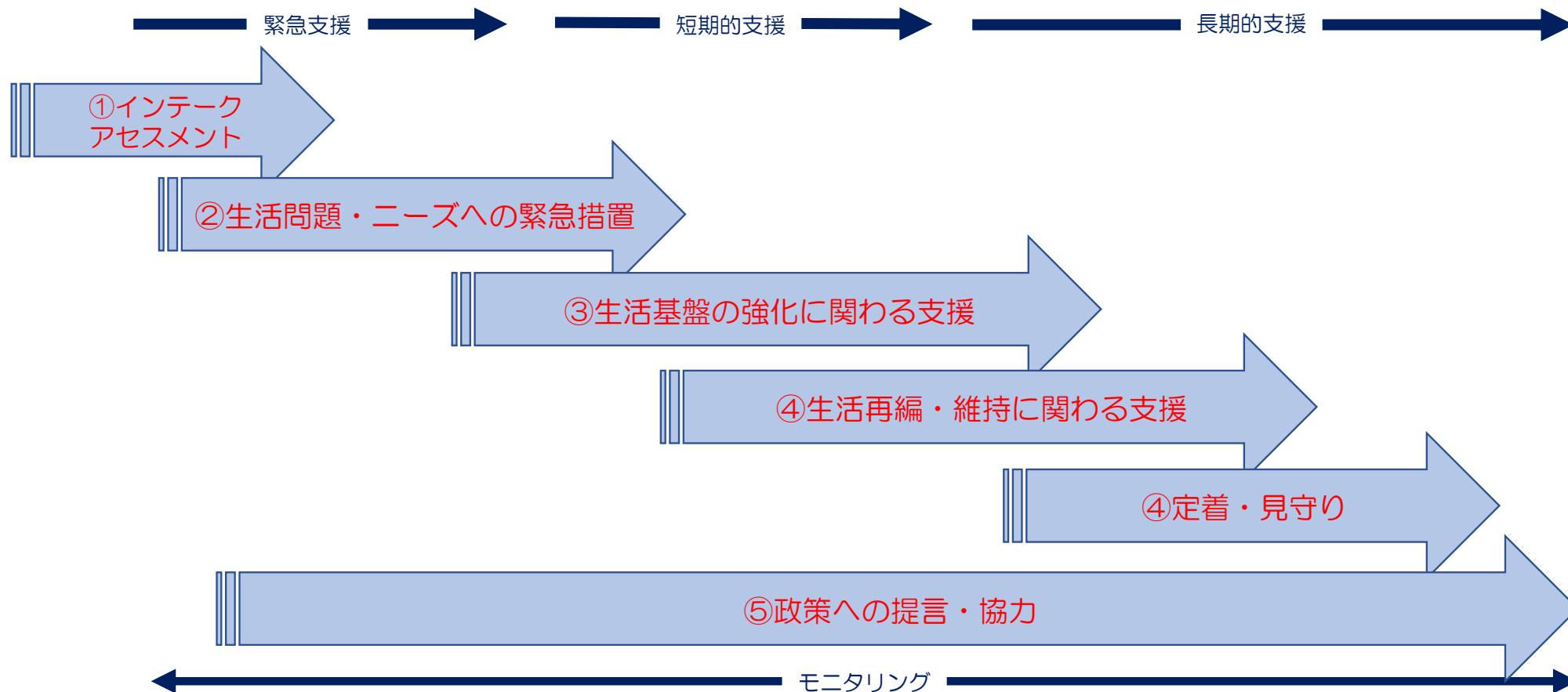
小口 将典, 2021/02/11

課題（問題）の解決型支援から 次なる支援への備え

- ソーシャルワーク機能の理解
- コミュニケーションの質的变化への備え
- 子どものウェルビーイングが保障される環境づくり
- スtrenグス視点、エンパワメント支援の考え方の転換
- 予測される困難さへの対応と予防

時間軸による支援の組み立て

保育ソーシャルワーク領域の限界



参考文献：窪田暁子（1984）「社会福祉方法論の今日的課題—社会福祉実践の構造」『第10回児相研セミナー報告書』

出典：小口将典（2018）「保育ソーシャルワークの展開過程」保育ソーシャルワーク学会監修『保育ソーシャルワーク学研究叢書第2巻 保育ソーシャルワークの内容と方法』p.93を改変。

東日本大震災の被災地の ソーシャルワーカーから見出されたキーワード

福祉系大学経営者協議会「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」より

あの時は

「何もできなかった・・・」

しかし、実際には・・・

- ① 顔見知りの関係がコミュニティの形成につながる
- ② 情報を整理、理解し、適正な情報を伝える
- ③ 声なき声に耳を傾ける姿勢
- ④ 状況にあわせたニーズ把握

保育ソーシャルワークにおける 伴走型支援 つながりをどうするか…

- 縦割り・枠組みを取り除いた支援体制（システム）構築の契機として。
- 相談・ニーズを受け止め、対応または関係機関につなぐ機能（相談を受け止めて、つなぐ、抱え込まない）。
- 支援関係者を調整する機能（担い手が必要）。
- つなげた後も、保育の場でつながっていることが支えている。
- 時間軸による支援の組み立てと長期的視点を見据えた備え（問題の質的变化への対応）。

まとめ

- 長期化する支援のなかで、保育者たちが疲れてきている。現場での実践を支えるスーパーバイザーとなるソーシャルワーカーを求めている。
- ソーシャルワーク実践における基本に立ちかえる。
- 保育施設同士の枠組みを取り除いた連携。
- メンタルヘルス、DV、虐待、経済的問題、孤立・孤独、生活再編の増加への備え（これまでの経験から、未来を見通す）。
- 保育の場において子どもの利益を追求するにあたってのソーシャルワークの役割と位置づけ。

ご清聴ありがとうございました。

**第70回（2022年度）日本社会福祉学会
秋季大会は関西福祉科学大学で開催予定です。**



**新型コロナウイルスの終息を願い、
全国大会へのご参加を
お待ちしております。**